

---

# あたしと鬼と幽霊と

麻由

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

あたしと鬼と幽霊と

### 【Zマーク】

Z2633D

### 【作者名】

麻由

### 【あらすじ】

小さい頃から幽霊が見える。見えるだけじゃなく話すことだって。そんなあたしのひそかな職業は、幽霊がらみの悩みを解決してあげることだ。でも、今度の依頼はいつもと少し違うみたい・・・

## プロローグ

目の前には黒でしない闇が続いている。

あたしは制服姿で一人立ち尽くしていた。

後ろからこれまでにないような殺氣を感じる。

あいつが追つてきているのだ。

あたしの息の根を止めるために。

逃げようと必死に足をバタバタと動かす。

でも今回もやつぱり、夢の中にありがちなスローモーション。

全力疾走しているはずの足は、のろのろと虚しく空を走った。

体が逃げると悲鳴をあげてくる。

わかってる、わかってるのに体が叫ぶことを聞かない。

『『じ』まで逃げる氣だ？お嬢さん』

耳元で耳にさわやいた。

ぞくりと背筋に恐怖が走る。

二つの間にか、あいつはすぐじろに迫りついていた。

震える息をか細く吐き出しながらおそるおそる振り返ると、突然大きな手で頭をつかまれ、あたしの足は地面から離れた。

あいつの指が頭を締めつけ、爪が食い込むのを感じた。

頭が割れるような痛みの中で、あたしは薄く目を開けてあいつを見た。

はつきりした顔はわからない。

人であるかさえも。

人間のような姿かたちなのに、頭からは2本の角。

欲望で血走った眼は、本物の血なんかよりずっと鮮やかな赤。

あいつは口元をゆがめ、残忍な笑みを浮かべた。

開いた口から獣のように鋭い牙が覗く。

あいつにとってあたしは獲物なのだ。

殺しの欲求を満たすための。

あいつは右手をゆっくり持上げ、ナイフのような5本の爪をあたしに向けた。

もうすぐあれがあたしをハッキリ裂きにかかる。

あの凶器からはきつと逃げ切れない。

体を堅くし、痛いほどきつと田をつぶる。

あいつの勝利の高笑いとともに、焼け付くような痛みが体を貫いた。悲鳴をあげる暇もなく、次の痛みが襲う。

叫ぼうとした喉も引き裂かれる。

なまたたかいものが体を伝つ感触を最後に、意識は遠のいていく。

死ぬならそれでいい。死んでこの痛みから解放されたい。

早く

早く終りませ

## 第1話・寺の少女の朝（前書き）

はじめまして。この小説を開いてくださつて、本当にありがとうございます。作者はまだ16歳で、大人の方の小説と比べると文章が荒削りで読んでいて未熟に感じるかもしませんが…。日々常に作者の頭の中に描かれている物語をできるだけ忠実に綴つていこうと思つてます。少しでもおもしろいと感じてくださつた方、どうか最後までお付き合いいただけたら幸いです。

ぱつと口を開いた。  
上に漬物石でも乗つかつてゐるみたいに胸が苦し  
い！

バジヤマも額も汗でぐしょりだ。あたしは張り付いた前髪を指でそっと分けた。

最後に見たのは一週間前だった。もうこないと思つて安心したのが  
もともと間違ひだった。

かんべんしてよ、月曜日の朝から殺される夢なんて。  
あたしはため息をつくと再び布団にもぐりこんだ。田覚めるなりも  
うちょっとマシな夢で田覚めたい。

一階から弟の声がガンガン響いてくる。悪夢でうなされていた姉への気遣いはかけらもない。

かなり刺々しい口調で叫び返すと、のろのろとベッドから降りた。

まるであいつがまだ頭を締め付けているみたいだ。  
何度か壁に激突しそうになりながら、ふらふらとキッチンにたどり  
着くと、家族はすでに朝ご飯を終えていた。

弟の圭太は口笛吹きながらお皿を片付けている。お世辞にもうまい  
とは言えない。

黒い学ランに、ワックスで髪をシンシン立てた弟は、あたしを見る  
とにやにや笑つた。

「こつまでぐーぐー寝てんだよ。ほんと、起いすのも一苦労だな  
つたく、中坊のぶんざいで生意氣なやつだ。

「えーえー、ほんと、あんたの馬鹿でかい声のおかげで快適な日  
覚めでしたわ、圭太様」

とびっきり美しい声でそう言つと、圭太はおえつと吐く真似をしながらキッチンから出ていった。

あたしは冷めたご飯と味噌汁を口にかきこんで、制服に着替えた。制服を見るときの夢がまたよみがえつてくる。これが真っ赤な血にまみれて…

ぶんぶんと頭を振つて振り払う。だめ、考えちゃだめだ。かばんの紐を引っつかんでローファーをはき、家を出た。

自転車の止めてある庭まで歩いて来ると、おじいちゃんはよれよれのパジャマ姿で寺の庭を掃除していた。ラクダ色の腹巻きまで装着している。おじいちゃんのセンスの良さなんて、すでによーく知つている。

「おじいちゃんつ

坊主頭がぴくつと反応し、こっちを向いた。

「なんだ万夜、また寝坊か

おじいちゃんはにんまりと笑つた。

あたしの大好きなその笑顔はたくさんのしわのせいでより柔らかく見える。

ちょっとだらしないところもあるけど、お父さんが死んだあと、あたしたちを男手ひとつで育ててくれた頬もしいおじいちゃんだ。

あとお坊さんらしく正装してくれたえすれば完璧。せめてワクダ色以外で。

「あのやーおじいちゃん、その腹巻を…」

「これが？いいだろう。あつたかくてな、すぐれものだぞ」  
おじいちゃんは腹巻きをつまんであたしに見せてきた。

あるとおじいちゃんは何か思い出した様な顔をした。

「やういえば、今朝女人の人から電話があつたぞ。夕方、よろしくお願  
いしますとか何とか

」

さくづ。

「あ…ああ～女人の人ね？ええと、なんて言つか…」  
おじいちゃんの口付きが鋭くなる。これはまずい。  
「…お前まさかまた」「…いつ行つてきまーす！」

あたしは止めてあつた自転車にまたがると、寺の門から飛び出して  
いった。

あたしはブレーキを軽く握りながら、坂道をのろのろ下っていった。

ふつーつ危ないとこだった。

とりあえず助かったものの、今日帰つたらおじいちゃんはあたしをこっぴどく叱るだろう。つるぴかの額に青筋を立ててわめくおじいちゃんを想像した。

あたしは俗に言つ、「見える」体質だ。むりに言つと、どつかの靈能者みたいにお経を唱えたり枝を振り回さなくとも、それらと話すことができる。

おかげで周りからはいつも注目の的だった。「問題児」として。何度病院に引つ張つて行かれたか、両手じゃ足りないくらいだ。

おじいちゃんは断固として認めてくれない。そもそも幽霊とか非科学的なものを信じない人種だから。けど、あたしはこの仕事をけつこう気に入っている。

その仕事つて言うのが、幽霊のお悩み相談所みたいな感じ。

ただし、お金がもらえるわけじゃない。ほとんどボランティアみたいなんだ。

唯一の報酬は、ときどきちょっとびり感動をわけてもらえるつてだけ。あとはもつ、困難と危険の繰り返しだ。

「 おい小娘」

「 あやつー！」

突然の声に、あたしはブレーキを緩めてしまった。自転車はすぐにスピードを上げ、坂道を滑り降りていく。

まずい、ここのままじゃ植え込みに突っ込んでしまう。

しかし自転車は急停止した。「自転車」は。

おしゃりが浮き上がり自転車から放り出されそうになつたのを、自力でドスン！とサドルまで戻ってきた。

「助かつただろ？」

辺りを見回しても誰もいない。それもそのはず、声の主はあたしの真上に浮かんでいたから。

その幽霊は、あぐらをかいてあたしを見下ろしていた。自転車が急停止したのもこいつの仕業だ。

いたずらうつ子のようなそばかすがある顔は、にやにや笑つてゐる。あたしがみつともない格好をしたのがおもしろくてたまらないらしい。

「げつ、義将……」

「なんだよ。またチ「クか？」

「わかつてゐならこいつ」としないでよ

「おかげで速く下れただろ」

あたしは無視して自転車を押して歩くことにした。さすがに乗る気にはなれない。

義将はふわふわとつこてきた。

普通幽霊つてこいつのは、生きてる人との関わりを持つとしない。まして、登校中の多忙な女子高中生に声をかけて植え込みに突っ込ませようとするなんて、もつてのほかだ。

長いもので、こいつとは3歳のときからの付き合いだ。あたしが幽霊と話せることを知つて、それからこいつはある「」とに姿を現して、気軽に話しかけてくる物好きな幽霊。

だいたい、そろそろ人通りも多くなってきたつていうのに幽霊と会

話なんかしていたら

間違いなく警察か病院行きだ。

周りの人には、一人でしゃべってるあたししか見えないのだから。

歩く足を止めると、息を吸い込んだ。

「あのね義将。一人でしゃべるのは勝手だけどあたしに話しかけないで。周りから見たら、あたしはぶつぶつひとりごと言いながら歩いてるよう見えんんだから！」

あたしはできる限り小さい声で、早口にまくしたてた。

義将はむすっと不機嫌な顔をした。

「ちえー、つまんねえな」

義将は唇をとがらせて、すうすうと消えて行った。やれやれ、おっぱらうのにも一苦労だ。

あたしは自転車にまたがり、学校へ急いだ。

### 第3話・解決屋の仕事

学校はいつも通り、何事もなく終わった。  
あたしはチャイムと同時に教室を飛び出ると、隣り町の依頼者の家に向かつた。

今日のお宅は最近建てたばかりらしい。オレンジの屋根で、いかにも少女趣味つて感じだ。  
ぜつたい新婚さんだ。

呼び鈴を鳴らすと、中からブリブリのHプロンをつけた女の人が出てきた。マイクが…濃い。

「あらあ～！あなたが幽霊の退治屋さんなの？まだ学生さんじやない！」  
「はい」 そうですが何か。  
「そうなの～なんだか意外だわあ…まつ、とりあえずあがつてちょうだい」

家の中はレースとピンクの世界だった。壁にもカーテンにも、今は

いているスリッパにも、レースレースース。

目がレースで侵されてしまいそう。住んでて平気なんだろうか。

女の人が依頼の内容を説明しているのを、あたしは砂糖水のような紅茶をすすりながら聞いた。

なんでも、時々家の中で廊下を走り回る音がするという。他にも、閉めたはずの戸が開いていたり、物が倒れたりするらしい。  
「ぜつたい、あたしが前飼つてた猫のケティちゃんだと思つのよー。

ダーリンと新しく引っ越してから死んじゃったんだけど……慣れないおひで疲れちゃったのかしら」「はいはい、ケティちゃんね。

もつと深刻なのがと思つたら猫探しなんだ。何だかアホらしくなつてくる。でも仕事は仕事だ。

「わかりました。とりあえず、家を調べてみます」

あたしはそのあと、家の中を歩いてみた。部屋を一つずつ、くまなくチックしていくけれど、特に変わったところはないみたいだ。

すると、テレビの上に立てかけてある3つの写真が目にに入った。

一番左の写真には、わたくしの奥さんと曰那さん。青空ときらきらした海をバックに、幸せそうに寄り添つていて。きっと新婚旅行の写真だとあたしは思った。

真ん中は少女と小さい男の子が写つた古い写真。少女はたぶん奥さんだ。子供の頃の写真だろう。

そして最後のは、ぶよぶよに太つた白いネコが写つていて。これがケティちゃん。

こんなに大きけりやすぐ見つかるんじゃないだろうか。

「ケティちゃん、ほおら出ておいで、ケティちゃん……」とつぶやきながら部屋を行つたりきたりして、出てくるのを待つた。しーんとした家に、あたしのケティちゃんを探す声だけが響く。猫は一向に姿を見せないまま、30分が経つた。

もつつ、どうなつてんのよー！

あたしは途方にくれて、ぐしゃぐしゃと髪をかきませた。すると、

かたん

と、かすかに奥の部屋で物音がした。奥さんはキッチンにいるはずだし、何よりその部屋はまだチェックしていない。あたしの頭にピーンと光が差した。

「ピングーだ。

あたしは、奥の戸をガラツと勢いよく開けた。

思つたとおり、幽霊はそこにいた。驚いた様子で部屋の隅からつちを見ている。

ただ、そこにいたのは猫じゃない。

小学生くらいの男の子だった。

あたしは目を見開いた。

「あ…あなたがいつも物音をさせてる幽霊なの？」

『誰?』

男の子は少し警戒気味に言った。

あたしはちょっとほつとしていた。人間なら話は早い。

「怖がらないで。あなたに何かしようつてつもりじゃないから。ただ、この家の人気が不安がつてるから、できれば住みかを変えてほしいの」

男の子はびっくりした顔をした。

『お姉ちゃん、僕が見えるの…?』

あたしは微笑んだ。

「だつて、こうして話してゐるでしょ?」

男の子は信じられないって顔でじつと動かなかつた。

そしてじゅうじく考え込んだ末、男子はゆっくりとわたしの前まで出てきた。

『……不安がるって、ここに住んでる女人の人も?』

「そうよ」

そう答えると、男子は悲しい顔になった。あわててこるよつとも見える。

ぐつと下に視線を落とし、やがてぼつりとつぶやくよつと囁いた。  
『不安なんて……そんなつもりじゃなかつたんだ。僕はただこの家の女人に……姉さんに気付いて欲しかつたんだ』

あたしあびつくりして目を見開いた。

「あなた……あの人の弟だつたの?」

男子はこくりとうなずいた。そういうばこの子、さつきの写真的の男子に似てる気がする。

「何で……氣づいてほしかつたの?」

男子は押し殺した声で語りだした。

『僕、8歳の時に死んだんだ。交通事故で。姉さんは僕が死んで、すごく泣いてた……本当に病気になるんじゃないかつてくらい、すごく悲しんで……放つておけなかつたんだ』

だからずっとそばにいて見守つてた。でも姉さんはだんだん元気になつて、大人になつて、みんなにお祝いされながら結婚した。僕だつてみんなと同じように姉さんの結婚を本当に喜んでるし、姉さんにおめでとうつて伝えたい。

でも……』

男子は肩をすくめた。

『これじゃあ気付いてもらえないよね』  
あたしは何も言えなかつた。

『それに…もう僕のことなんか忘れちゃつたのかもしれないし』  
あたしはいつの間にか涙ぐんでいた。まばたきをして、男の子の頭  
をそつとなれる。

その手には何の感覚も伝わつてこないけれど、不思議と温かかつた。  
『そんなこと、絶対ないよ』

男の子の頭をじっと覗き込んで言つ。

「お姉さんには…あたしから伝えておくから。あなたに代わつて」

『本当…?』

黒い瞳にきらめりと光がさした。あたしはじっかりとつなづく。

「ほんと?」

男の子は嬉しそうにこわいこわい笑つた。

『ありがとう』

その笑顔が、あたたかな金色の光に包まれていく。逝く時が来たの  
だ。

男の子はまばゆい光の中で言つた。

『あと…姉さん、あんな人だけど氣を悪くしないで。本当はすぐ  
優しい人なんだ』

その言葉に、あたしは顔を赤らめて首をすくめた。

男の子は最後にこわいと笑うと、一筋の金色の光になり、天井を突  
き抜け空へと昇つていつた。



キッチンに戻つてくると、女人人は頬杖をついてぼんやり外を眺めていた。憂いを浮かべた顔はさつきとは別人みたい。あたしがぱたりとドアを閉めると、奥さんは顔を上げた。

「あら…もう終わったのね~」

そう言つてにつこりと笑つた。その笑顔は、あの男の子にそつくりだ。

「何か、考え方してたんですか?」

女人人は、また窓の外に視線を移す。

「ええ…ちょっと、死んだ弟のことをね」

「えつ?」

あたしは思わず、女人人に歩み寄つていた。

「どんなことを?」

奥さんはあたしを見てにこっと微笑んだ。

「大したことじやないのよ? ただ、私が結婚したつてことを知つたら喜んでくれたかしら…つてね」

「…。」

「弟が死んだとき…本当に悪夢みたいだつた…。あたしが夕飯の買ひ物を押し付けて、その帰り道にトラックにひかれたの」

奥さんの手が小さく震えているのがわかつた。

「あの子…文句を言いながらも買いに行つてくれたわ。そのあと事故に逢つとも知らないで…」

「まだ、ほんの小学生だつた…。私が行かせたせいで…私のせいで死んだの」

あたしは違うと言つてあげたかった。でも、話を聞いてあげなくち

やと思つてぐつと飲み込んだ。

「私は自分を責めたわ。どうして…どうして行かせたのって。あたしが自分で買い物に行つていれば、弟は生きていたのに、つてね…。毎日悲しみと後悔でいっぱいだった。物も食べずに家に閉じこもつて…地獄のような日々だったわ」

あたしにはこの人が絶望の中で暮らす姿なんて、想像できなかつた。「でも、このままじゃいけないつて気づいたの。こんな私を見たら弟が悲しむ、つて。その気持ちが心の支えになつて、今私はこうして生きているの」

奥さんはすっと顔を上げた。

「だから、弟に伝えたいの。私は今とっても幸せだから…安心して天国に行つてねつて。

…無理な話だけどね」

奥さんはふふふと笑つたけど、あたしは笑えなかつた。

「それで、ケティちゃんはどうだつた?」

言つのがためらわれたが、ゆっくり口を開く。

「あの…実は弟さんに…あたし伝えるように頼まれてきました。あなたに、『結婚おめでとう』つて」

奥さんははつとした顔になつた。立ち上がり、両手をあたしの肩に優しく置いた。手の震えがあたしの肩に伝わつてくる。

「あの子が…そう言つたの?あなたに?」

あたしは奥さんの目をまっすぐ見つめた。大きな瞳は涙で潤み、今にもあふれ出しそうだ。

「はい」

あたしは微笑んでうなずいた。

奥さんはそれ以上何も聞かなかつた。代わりにぽろぽろと涙をこぼした。

厚いメイクが流れしていくのも気にせずに黙つて泣いていた。

そして、あの子と同じ笑顔でにっこり微笑んだ。

「ありがとう…」

帰る頃にはとつぱり日が暮れていた。女の人はもうすっかり泣き止み、旦那さんも帰ってきて、あたしは吐き気がするほどのおつらいラブラブっぷりを見せつけられた。

でも、あたしはムカつかなかつた。これが、この人が悲しみを乗り越えた先で掴んだ、幸せの形なのだと思ったから。

一仕事終えて体はぐたぐたに疲れていたけど、妙にぽかぽかした気持ちだつた。

あたしの人を見る目もまだまだつてことが判明したし。

オレンジの屋根の家を振り返る。

見送りに出て来てくれた女人人は、旦那さんの腕の中でにっこり微笑んでいる。

その幸せな夫婦に手を振り、あたしは我が家へ向かつて自転車を飛ばした。

## 第5話・奇妙な依頼者

住宅に囲まれた帰り道は、人通りがほとんどなくなっていた。

真っ暗な道を電柱の街灯だけが道を照らしている。来るとき通つた道なのに脇間にとはまつたく違う雰囲気だつた。

ざわざわと冷たい風も吹いてきた。ひゅうーっと耳元で風が鳴る。なんだか不気味だ。あたしの胸に不安が広がる。さつさとつけづけに帰る。

あたしはマフラーに顔をうずめて、じぐ足を早めた。  
とその時、

びゅうつーと前から突風が吹き付けた。あまりの強さに、自転車はスピードを失い、あたしはよろけて足をついた。  
風はあたしを吹き飛ばしそうな勢いでびゅうびゅう吹いたあと、しばらくして止んだ。

ふうー、もう安心だ。

閉じていた目をぱちぱちとしばたいて、顔を上げると…  
なんとそこに、髪の長い女が立つっていた！

あたしはびっくりして飛び上がりそうになつた。

『 いじばんは』

その若い女性はそんなあたしにかまつ」となく、すつと頭を下げた。

な、なんだ…口裂け女とかじゃなかつたのね…

そうわかつてほつとしたが、あたしのどきどきした心臓はまだ治まつていなかつた。

てこうか、よく見るとこの人…幽霊だ。

女性は頭を上げてあたしを見つめた。あたしは今改めてその顔を見て気づいた。

すこぐ、きれいな人。しつとりした日本人らしい顔立ちで、真っ白い肌に長い黒髪が際立つていて。しかし、その目はどこか虚ろで、何の感情も読み取れない。

『あなたが幽霊と話せるという、朝日奈万夜さんですね』

「はい、まあ…そうですけど…」

かしこまつた態度に、思わずまじついてしまつ。

女性は事務的な口調で言った。

『あなたに、依頼をお願いしたいのです』

その言葉にあたしは内心驚いた。今までたくさん依頼を受けてきたけれど、幽霊の方からお願いされるなんて一度もなかつたからだ。

「は…はい、あたしに出来ることなら何でも」

そう言うと、女性の表情がちょっとだけ和らいだ。

「で、どんな依頼ですか？」

女性は少しためらつてから言った。

『明日、あなたの学校に男がやつてきます。その男と仲良くなり、私のもとへ連れて来て下さい』

…はい？

あまりに短かつたので、あたしはすぐには理解できなかつた。

てこうか、依頼の意味がよくわからぬ。特に、その男と仲良くす

るつてとこが。

「あのー…連れて来るのはいいんですけど、何で…」

『詳しことはまた後ほど』『J説明致します』

女強めたりじう強引だと言ひた。

『 それでは、また…』

女性はもう一言残してすうと消えていった。

あたしはぽかーんとして立ちあがいていた。

「あら? 明日学校に来る男と仲良くなつて? 女性のもとに連れて来  
いと?」

あたしは道の真ん中で一人憤慨した。

それに男つたつて特徴もわからない。一つくらい教えてくれても良さそうなものなのに。

「わナわかんな」

『全くだな』

卷之三

かばごと振り返る。

「あ――――つ――――義将――――」

۷۹۸

今朝追つ払つたはずのそいつは、にかつと笑つて片手をあげた。こ  
つわはそんな毫もかん氣分でねえー。

「な、ななな何やつてんのよー！」

『うーん、 じいて言えば散歩してたら小娘が美女と話してたので…』

『声かけてみた!』 そう言つてあたしの前に両サインを突き出した。  
あたしはツンこんであげる元気もない。

「あらそー… よかつたわねー。じゃ、あたし帰るから」「あたしは深いため息をつくと、のののと血転車にまたがつた。

『なんかおもしろい話したなー、学校に来る男がどうとか…』  
『こいつ… ちやつかり聞こてるし。』

『俺、今日からお前につけてちやおつかなー』

・・・はつー? 「何で! ! ! 」

『だつて何かおもしろがつだし』

『こつちはちつともおもしろくないんですか? ! 』

あたしは不愉快な気分でうめいた。

反抗してやりたかったが、もう今日はくたくただ。それここいつはあたしがどんなにおっぱらつても勝手についてくるだらう。現に今までそうだつたんだから。

消えたいときには勝手に消えるんだらう。

なんだ、許したところでこれまでと大して変わらないじゃない。

「勝手にすれば」

ふんと鼻を鳴らしてやう言つたと、義将の顔がぱつと輝いた。  
やれやれ、やつかになやつと関わつたものだ。

とりあえず、いかに帰らひ。 もつかなり夜が更けていた。

やつと寺の庭にたどりついた。義将は庭の上駒をばんばん飛び回つてせしゃこでこる。

まさか本気で家までついてくるとは…。その気力とヒマをこもは  
やあきれるの域を超えていた。はあつとため息をついた。

言ひとへたゞ一

「あたしはおしゃちほこをつついでいる義将に叫んだ。

やり方知らないけど。

義将は、はいはいと喜ぶように手をひらひらさせた。絶対こいつ聞

ほつといて玄関の戸をガラガラと開けた。何だか暗い……何かが家の明かりをさえぎっている。

まさか・・・・・おそるおそる視線を上げてみる。

それは仁王立ちして行く手を阻むおじこちゃんなんだつた。

「ほお…お仕事は楽しかったか？」万夜：

「翁翁」二字，是翁的本字，「翁」字是後起的。

あたしはなんとか笑つてみせたが、かなり引きつっているに違ひな

「そ、う、あ、ま、き、こ、そ、」

「」の馬ツ鹿娘があああああつつ――――。」

「山鳥が一斉にバサバサと森から飛び立つた。」  
とか――ん！と帝で爆発が起つた。

おじいちゃんはあたしを玄関に正座させ、ものすごい勢いでわめきました。

あたしは気が遠くなるような説教を数時間聞かされたあと、目から火花が飛び散るよつないたーいげんこつをお見舞いされた。

その夜、あたしは夕食抜きの刑をくらって、死んだようにベッドに寝つこうがっていた。ズキズキする頭にそっと手をやると、大きなたんこぶができている。

あんにやろう・・・・・

義将はさつきから部屋の真ん中にどつかと座っている。

『おまえんちの出迎えは変わってるな』

ほんっと、もうサイローよ。

『さつきにさんの部屋に行つたけどな、寝言でまだおまえのことしかつてたぞ』

義将は笑いを含んだ声で言った。

「へーーー」明田には忘れてますよつじ。

ぐううーとお腹が鳴った。ああ、お腹すいた…

その時、ノンノンとドアを叩く音がした。

義将ははつとして、すぐに部屋の隅に移動した。

「万夜？起きてる？」

圭太の声だ。

「あー…うん、起きてる…」

あたしははうめくよつに返事をした。

ドアを開けて入ってきた圭太の手には、夕食がのつたお盆があつた。あたしは一気に気分が上がった。

「ほら、これでも食えよ」

圭太はちゃぶ台に湯気の立つシチューを置いた。よだれが出るほどおいしそうだ。

「圭太…あんたってほんと最高…」

あたしは思わずベッドから降りて圭太に飛びついた。

「うわつよせつて、きもい！」

ぱっと手を放したあとも、あつたかい気持ちでいっぱいだった。

あたしは、弟のたまに優しいところが大好きだ。

弟はよれたスウェットを直すと、いつものように目を輝かせた。

「…で。今日も聞かせてくれよ、依頼の話！」

あたしはあつたかいシチューで口をはふはふさせながら、今日の出来事を語つた。

圭太はあたしの仕事話を聞くのが大好きらしい。つまらない話でも熱心に耳を傾けてくれる。

今日出会つた姉弟の話が終わると、しみじみとした顔で言つた。

「那人、これからも幸せでいてほしいな…弟のためにも」

「いるよ、ぜつたいにね」

あたしが自信満々にうなずいてみせると、圭太は「ははっ」と笑つた。

「ていうか、おじいちゃんもあんなに怒らなくともいいのにね？ほんつと頑固なんだから…」

あたしはふんと鼻を鳴らして言つた。

圭太はやれやれって顔をした。

「あのなー…そういうお前もあんまり心配かけさせんなよ

「心配…これが？」

あたしはたんこぶを指さした。

「恥ずかしがつてんだよ、あれは。あの石頭が『よく帰つたな』なんて言つわけないだろ。万夜は知らないだろけど、おじいちゃん、お前が帰つてくるまでそわそわして家中歩き回つてたんだぞ？ 何度も何度も『今何時だ？』って聞いちゃつてや」

圭太はくすりと笑つた。

そんなおじいちゃん、あたしは見たことない。怒鳴つてこるところは嫌といつほど見たけど。

あたしが幽霊の依頼に行くことを、心中では心配していくれただろうか。

だからいつもあたしに反対するのだらうか。

「…まつ、土産話を作つてきてくれるのはいいけど、ほびほびにな

圭太はそつ言つて立ち上がつた。あたしは答えられなかつた。

「じゃ、俺寝るわ。両片付けといてくれよ」

「うん…」

パタリとドアが閉まつた。義将が部屋の隅からゆつくり出てきた。

『いい家族だな』

あたしは義将に弱く笑つた。

「でしょ？」

その夜は、ぐつすりと眠れた。



『……い、お起きて』

誰かが呼んでいる。まだ目を開けたくないのに。

『お小娘、ぐうすり寝たのはいいけど寝過ぎじゃねーか?』

『寝……すき……ああ……』

がばっと起き上がった。

時計を見ると、8時をとつて過ぎていた。

「やつ、やばー!」

あたしは転げるよひにベッドから出た。

義将は頭をぽりぽりかきながらあたしの慌てぶりを観察してくる。

「ひょっと義将! なじまつとじんの、丑いってよ

『何で』

「モーがーえーるーのー!」

そつまつと、義将はぶつぶつ言しながら壁の向いに消えていった。

着替えを済ませて鏡の前に立つ。

げつ、ひどい寝癖だ。でも直している時間はない。

あたしはスプレーを大量に吹き付けて応急処置をした。

階段を駆け降りると、どんと誰かにぶつかった。おじいちゃんだ。

「なんだ、起きたのか」

おじいちゃんはむすつとした顔で言った。でも、もつ怒ってはいな

いみたいだ。

「うん」

ほんのひよつとだけ、氣まずい空気が流れた。やがておじいちゃん

はつめくよりに口を開いた。

「お前がどんなことをやつてゐるのかわしは知らんが…」

「おじこちやん」

「？」

「ありがとね」

そう一言つぶやいて、キッチンを素通りして玄関に向かった。『J飯を食べてる時間はなれやうだ。』

ドアを開けると、外は申し分ない晴れ空だった。

「わっ、急がなきや！」

あたしは学校に向けて自転車を『J』を出した。義将もふわふわとついて来る。

『お前なんで笑つてゐるんだ？』

「別に」

今は無理でも、こつかきつと、おじこちやんも躊躇つて思えるような孫になつてみせる。

日本中、『J』、世界中の誰よりもすこい解決屋になつてやるんだ。

景色はだんだん都会になつていぐ。人通りも多くなり、山なんて遠くにちよつぴり見えるだけだ。

やがてその中に、によつたりと背の高い建物が見えてきた。

その壁は色あせて、所々はがれでいる。あたしの通つ高校だ。

県の重要文化財である旧校舎と並んでいても、ぼろぼろさなり決して負けていない。

『おおおーー見り小娘、おな』がいつぱい『J』の『J』。

『せこはー』

義将はぞろぞろと校門をくぐつていいく女子高生に大興奮してこる』  
様子だ。

本当にこいつを連れてきてよかつたのか？自分…

あたしは義将に小声でささやいた。

『いい？学校に入つたらあたしに話しかけちゃだめだからね』  
義将は自信たっぷりといった顔をした。

『わかつてるつて。オレはそこからゆーつづつ観察させてもりつか  
らな』

そう言つて指さしたのは、あたしのケータイにつこつこするウサギの  
ぬいぐるみだつた。

『…え？どうやつて？』

そうあたしが言つと、義将は得意げな顔をして『ほつー』とぬいぐ  
るみに向かつて飛び込んだ。

すると、義将の体はしゅるしゅると掃除機のようく吸い込まれ、ぬ  
いぐるみの中に消えていった。

『えつ何？どうなつたのー？』

あまりに突然だったので、あたしは何が何だかわからなかつた。

『つーむ、少しごわごわしてゐけど、まあまあ居心地はいいな』

義将の声は間違いなくウサギから聞こえてくる。まさか本気でぬい  
ぐるみに入つちゃつたの？

あたしがあつけにとられたので、義将の上機嫌な声が聞こえてき  
た。

『ま、お前が知らない間にこいつことも覚えりやつたんだな、オ  
レ』

でも確かに、こつしていれば一日中義将を監視しなくてもいいし、  
義将も女子にいたずらできないし・・・

あたしの顔に笑みが広がる。やれやれ、今回は一本とられたみたい。

『やるじやない』

義将がにやにやしているのがわかつた。

あたしは駐輪場に自転車を置き、校舎に入つていつた。

あたしは階段を駆け上がり、廊下の突き当たりの教室へ向かった。  
「2 8」と書かれた教室からは、がやがやとひとときわ大きなしゃべり声がする。

うちのクラスは校内でも指折りのバカがそろってるからだ。

ガラガラとドアを開けると、その声はいつも大きくなつた。  
ドアの近くの席では、バリバリに化粧した茶髪の女子軍団が恋バナで盛り上がつている。（義将が『こいつらはヤマンバか？』と恐ろしがつた）

何人かの男子は教室のうしろのスペースを陣取つて野球をしている。  
ちなみにボールは丸めた手袋で、バットはマフラーだ。  
そこからは時折歓声が上がつた。

あたしはヒットが飛んで来ないように祈りながら、そろそろと一番後ろの机にカバンを下ろした。

すると、肩をぽんつと叩かれた。

「万夜、おはよ」

うしろを振り返ると、サラッとした黒髪が目に入った。くせつ毛のあたしには永遠のあこがれだ。

「麻海ー、おはよー」

麻海はにこりと笑つた。女のあたしでもズキュンときてしまつがわいさ。

おとなしくて優しい性格の麻海は、男子にもモテモテだ。  
あたしにはない物をみんな持つてうらやましい。

そういえば、麻海の長い黒髪を見てると何かを思い出す。  
何だっけなあ…

その時、バーン！とドアが乱暴に開けられた。みんな一瞬静かになり、ドアに視線が注がれる。

すると、息を切らした女の子が興奮したよつすで教室に飛び込んで来た。

「ねえっ！今日このクラスに転校生来るんだって！…」

「えええーっ！まじで！？」

教室は一瞬にしてハイテンションになつた。

女子は『転校生』の情報を聞き出せうと、入つて来た女の子の周りに集まっていく。

「ねつ、行つてみない？」

そつ言つた麻海の目も好奇心できりきりしている。

「う、うん…」

あたしは麻海に引っ張られて輪の中に入つていつた。  
何かがスッキリしない。何を忘れてるの？

「さつきね、職員室に行つたのよ！そしたら、超美形の男の子が担任と話してて『じゃあ今日からつけのクラスの一員だな』って言つのが聞こえたんだから」

「えつ待つて、超美形つてマジ！？」

「マジマジ！背高くて黒い髪で、顔なんてもつ…超かっこいい！」

「キャー！」

# 黒い髪、転校生、男の子？

「あ―――つ―――！そ――うだ――つ――た――！――！」

あたしは思わず叫んだ。

みんなからの怪しげな視線があたしに注がれる。

「万夜、どうしたの？」

「あーいや、何でも…」

はははと苦笑いするが、また話は再開した。

義将があきれた声で言つた。

だつて…おじこちゃんにすりに怒られてそれどりぬけやなか  
わーわー

だけぢこひしちやいられない。

あたしはこれから来る転校生と友情を築かなきやいけないんだから

その時、キーンゴーンカーンゴーン…とチャイムが鳴り響いた。あたしの心臓はドクドクと高鳴り始めた。

ホームルームの始まりのチャイムが鳴つて、みんなバタバタと席に着いた。

鳴り終わると、中年のオジサン先生が教室に入ってきた。今日も立派なバー「コードだ。

「起立つ、礼！」

あいさつが終わってみんなが前を向くと、先生はいつものようにヨドキヨドし始めた。

このオジサンは注目されるのがえらく苦手な人らしく、暑くもないのにつるぴかの額には汗が輝いている。

それをしわくちゃのハンカチでいそいそと拭きながら、先生は話しだした。

「えー…まああれだな、今日は3年がテストとこうことで…」

その間も、あたしの胸は休むことなくドクドク言っていた。  
どんな人なんだろう。依頼のことを別にしても、早く顔が見たい。  
先生のるーい会話スピードにやきもきした。

「えー…それでだな、これが最後の連絡だが…今日からこのクラスに新しい生徒が増えることになった」

「来たつ！」

「それでは、えー…成神くん、入りなさい」

全員の視線がドアに集中する。すりガラスに人影が揺らめき、ゆつ

くつと戸が開けられる。

そして…『転校生』がすっと教室に入つて來た。

あたしは息を飲んだ。 その完璧な容姿に。

背が高くてすらりとしているのに、無駄なく筋肉がついた体型。あたしと違つて贅肉なんてものはまったくついてなさそうだ。黒い髪はワックスでいい感じに崩してあって、左耳からは小さなピアスが覗いている。

でも何より目を引いたのは、その顔だった。

真ん中まで歩いて来て正面を向いたとき、そのすべてがあらわになつた。

信じられないほど整つている。

すつと通つた鼻筋も、薄い唇も、どこを取つても完璧だ。だけど、真つ黒な瞳は冷たく、鋭かつた。まるで何者も寄せつけまいとしているかのように冷たい瞳。まるで威嚇しているかのようなその視線に、少なからず恐怖を感じた。何だかすごく怖そうな人だ。

クラスのみんなも同じことを思つてゐるに違ひない。

担任はかわいそうに、すっかり彼の冷たいオーラに怯えているらしい。

「じ…じゃあ、一言軽くお願ひしてもいい…かな？」  
と、じどりもどりに言つた。

『彼』は低い声で自己紹介をした。  
「成神聰也です。よろしくお願ひします」

冷たく感情のない声には、よろしくなんて気持ちはこれっぽつとも

含まれていなかつた。

とその時、成神聰也の視線があたしを捕らえた。

あたしは射抜かれたように動けなかつた。あたしの心臓はこれまでにないほどドキドキいつている。

すると、成神聰也の眼がみるみるうちに険しくなつた。その黒い瞳には、憎しみさえ宿つてゐるかのようだ。

あたしは恐怖でブルツと体が震えた。まさに『蛇に睨まれた蛙』状態。

あたしは自分がぽかーんと口を開けていたことに気づき、あわてて口を閉じた。

彼から見たら、さぞマヌケな顔だつただろう。

と、彼の視線がふつとはずれ、あたしは解放された。だけど、まだ胸が苦しい。

何であんな眼で見てくるの？

成神聰也は「すんだぞ」という風に担任のほうを見た。バーードが乱れていなかチェックしていた先生は、ぱつと頭から手を離した。

「おお、終わつたのか…じゃあ、ええつと…」

先生は教室を見わたしてゐる。何だかいやな予感。運の悪いことにあたしの隣は、空席だ。

「じゃあ…あの端つこの席で、いいかな？成神くん…

「はい」

やつぱり来た――――！

彼は通路をつかつかと進み、あたしの隣の席に座つた。あたしは周りが一瞬にしてぴりぴりした空気に変わったのを感じた。

そこでホームルームの終わりを告げるチャイムが鳴り響いた。

先生はそそくさと教室を出て行き、あたしは『まことにこの中で取り残される。

この人と仲良くなれって?ムリだ…

## 第10話（前書き）

「んにちはー、実はこのたび、読者のみなさんのおかげでこの小説のアクセス数が2000を超えました！」こんなにたくさんの方に読んでもらえるなんて、本当に嬉しい限りです。年末年始で更新が遅くなりますが、みんなに楽しんで読んでもらえるようがんばって書きたいと思います。これからもよろしくお願いします。

な……何なのよあの男はっ！

あたしは一人トイレでうなだれていた。

なんか感じ悪いし怖いし、どうやつてあれと仲良くなれっていうの？  
はあー…とひとりでにため息がこぼれる。

『ずいぶん無愛想なやつだな、お前が友だちになる男つてのは  
ほんとよつ

顔を上げて鏡を見ると、今朝スプレーを吹きかけた寝癖は見事に再  
発していた。

暗い気分で水をつけていると、麻海がトイレに入ってきた。  
「あつ万夜、ここにいたんだ」

にこりと笑つてあたしの隣りに立つ。

「…ねえ麻海…さつきの転校生、どう思つ？？」

麻海はちょっと困った顔をした。

「うーん…何ていうか、近寄りがたい感じだったよね…かつこいい  
けどす」ぐく怖そうだし」

だよね…

ていうかあれは、自分から近寄らせないようにしてるつて感じ。  
あの嫌悪感に満ちた瞳を思い出した。

「万夜、隣りの席だけど…がんばってね

「うん…」

とは言つたものの…

そのあとからの時間は気まずいの一言だつた。

『やつ』はこつちに見向きもせずに窓の外を眺めていた。

…やつぱつこれは、話しかけるべきなの？

結果は明らかに田に見えているけど。

それにあの瞳に耐えられる自信が全くない。思い出すだけでもふるつと身震いしてしまつ。

話しかけたりなんかしたら、視線で殺されるだらつ。

ええい、負けるもんか！

「ああ…あの…」

なけなしの勇氣をふりしほる。

ありえないほどかつこいに顔がこいつかに振り向いた。うわーっあたしほんとに話しかやつてる。

「え…ええと、その、困つたこととかあつたら何でも聞いて…トセ  
い…」

なんであたし敬語？

思わずツツコミを入れてしまつほど情けないしゃべり方だ。

すると相手はふつと視線をそらした。

「別に、あんたに世話になることなんてない」

そう冷たく言つた。

こいつ…こいつはこんなに親切に言つてんのに…！  
笑顔が引きつりそつだつたが、ギリギリ我慢した。

「あ、あはは…まあそんなこと言わないで…あつ、あと学校の中とかわからなにとこあつたら…」

「いらないって言つてるから」

成神聰也は突きはなすように強く言い放つた。

「あんた、しつこい」

その言葉が心をぐさりと刺した。

わつきの眼だ。

びくつと心臓がはね上がつた。憎しみと嫌悪感をひしひし感じて、背筋に寒気が走る。

謝つてその場から立ち去るしかなかつた。

「い…ごめんなさい」

そしてそのあとは成神聰也と一つも言葉を交わすことなく、一日が終わった。もうあたしに、それ以上話しかける勇気はなかった。

帰り道、あたしは自転車をとぼとぼ押して歩いていた。

あたしは何をしたわけでもないのにゲッソリと疲れ切っていた。持つてゐる精神力を全部使い果たした気分だ。

家にたどり着き、夕飯も食べずにベッドに倒れこむ。とにかく今は何もせずに休みたかった。

義将が負のオーラを発してゐるあたしに近づいてきた。

『ま、お前には少々難しい相手だつてこつたな。明日またがんばればいいんじゃないか?』

と、何気なく言った。

あたしは聞いてるようで聞いていなかつた。頭の中がもやもやした感情で埋め尽くされていく。

あたし、何やつてんだろ。見るからに冷たい転校生にわざわざ話しかけて? 結局突き放されて? かつこわる…

「もうやだ」

心に積もつた不満が固まつていく。

口からわずかに漏れた気持ちは一気に流れ出した。

「もうやだよ、こんなの。大体、何であたしはこんな意味不明なことしなくちゃいけないのよ? あの女の人自分が自分で会いに行けばいいじゃない。おかしな依頼してきて… あいつと仲良くなるつて何? あんな感じ悪いやつと? 意味分かんないしつ!」  
愚痴まじりに一気にぶちまたた。

部屋はしんと静まり返つてゐる。

あれ? なんで何も言わないの?

『お前、本気で言つてるのか？自分で会いに行けばいいって？』  
「え…？」

義将は険しい顔をしていた。あたしが見たことない義将だった。  
静かな声に、聞きなれた明るい面影はない。

『どんなに話しかけても氣付いてもらえない。だから見ることしかできないんだ。幽靈がどんな思いをしているか、考えたことがあるか？お前は簡単に幽靈と話せるからわからないかもしないけどな』

あたしは何も言えなかつた。

『きっとあの幽靈も何かを伝えられずにいる。お前はそれができる。だからあのおなじはお前のこと信じて、依頼したんだ。それを投げ出すのか？オレも、力になれるやつはお前だけだと思つけどな』  
義将はそう言つてふつと消えていった。

あたしは空っぽの部屋に一人取り残された。時計だけがカチカチと音を響かせている。

幽靈がどんな思いをしているか、考えたことがあるか？  
いとしい家族にも友達にも存在を気づいてもらえない、思いを伝えられない歯がゆさ。空気のように扱われるつらさ。

あたしは幽靈とも人間とも話せる。思つたことをすぐに云えられる。そんな気持ち、考えたことなんて、なかつた。

どんなに悲しいだろう。

その夜あたしは沈んだ気持ちで田を開じた。

ちゅんちゅんと小鳥の声がする。あたしはぱちりと目を開けた。まだ外は明るくなつたばかりらしく、カーテンからオレンジ色の光が差している。

こんなに早起きしたのは久しぶりだ。背伸びをして部屋を見渡す。やつぱり義将はいない。

あたしは制服に着替え、髪型もワックスでぱっちりセットした。そして、じつと鏡を見つめた。目の下にうつすらくまができるけど、どこにでもいそうな普通の少女が映っている。

あのおなじはお前のことを信じて、依頼したんだ。

昨日の義将の言葉がよみがえる。

違う。あたしはそんな大した人間じゃない。ただ能力を持つてるだけ。嫌なことからはさっさと逃げ出そうとする、最低なやつだ。

だけど、そのままで終わりたくない。  
こんなあたしでも、あの女人のためにできることがあるって信じたい。

あたしはしゃきっと体を起こして、階段を下りた。

キッチンに行くと、圭太が朝ごはんを作っている最中だった。

「えつ…万夜！？いつたい何があつたんだよ？」

圭太は万年お寝坊のあたしが立っているのを見て、信じられないつて顔をした。

「別になんでもないわよ」

圭太は疑わしげにじろじろ見てきた。

「ふーん… 万夜にもちゃんと早起きする知能が残ってたのか。びっくりだなこりゃ」

「んだとつ小僧！」

あたしは必殺パンチをお見舞いした。

「おわっ！ いつてーな、味噌汁こぼれるだろーバカ！」

なべを片手にぶんぶん腕を振り回す弟はかなりかっこ悪い。あたしは思わず笑ってしまった。

あたしは早めにじい飯を食べて、出かける支度をした。

今日は絶対に、ちゃんと話してやるんだから。もう怖い気持ちはいつもなかつた。

今からでも遅くないだろ？ か。義将をがっかりさせてしまったけれど。

もつあたしに失望して、帰つてこないかも知れない。

そう思つと、一瞬暗い気持ちがよぎる。そして、ガラガラと戸を開けた。

するとあたしは、家の前にあたしのおんぼろ自転車が置いてあるのを見つけた。

自転車は倉庫にしまつてるので、ここにあるはずはない。でもあたしにはすぐその原因がわかつた。

荷台の上に乗つかつてあぐらをかいているのは、義将だつたからだ。きつと、靈力でここまで運んできてくれたに違ひない。

あたしの足音に、義将は振り向いた。

『やる気になつたか？』

あたしはうなづいた。

「『めん。もう絶対、投げ出したりしないから  
義将は視線を落として、ぽりぽりと頭をかいだ。

『まあ、オレもつこ言い過ぎたつていうか。長年幽靈やつてゐるとい  
やつぱな』

あたしは微笑んだ。

「わかつてゐつて

『ま、とつあえず、いつからが朝日奈万夜の本番つてわけだな』

「そつ

## 第1-2話・新たな謎

いつもより30分も早く学校についた。

学校にはまだ人がまばらにしか来ていらないみたいだ。  
教室のドアをガラッと開けると、他の子と話していた麻海があたしに気付いてそばにきた。

「おはよ万夜、今日早いね……こつちはギリギリに来るの」「ちょっとね……」

そう言いながらあいつの席をちらりと見る。  
まだ力バンがない。

「あの転校生、まだ来てないんだ……」

「ううん、来てるよ？」

「へっ？」

「私、今朝見かけたの。屋上に行く階段を登つてつたよ  
屋上ね……行つてみるか。あたしはぐるっとターンした。

「サンキユッ、麻海！」

麻海はにっこり微笑んだ。

薄暗い階段を一段とばしで駆け上がる。

何でこんなに急いでるのか自分でもわからないが、妙に気持ちが急  
いていた。

息を弾ませて、屋上に出る扉の前に着いた。

薄汚れた扉はちよこつと開いている。やつぱりここにいるんだ。  
顔を押し当てて隙間から外を覗いてみた。

広いコンクリートの地面に一人寝つこうがっている人影が見える。  
間違いない、彼だ。

寝ているのだろうか？そっちのほうが安心だけど。

『あいつに会つて何話すんだ？』

うーん確かに…何を話せばいいんだろう?まともに言葉のキャッチボールはできないだろ?と断言できる。

「とつ、とりあえず、あいさつからよね!」

『 気合いを入れてガツツポーズで言つたのに、義将はため息をついた。『いや、やっぱオレが見てくるから小娘はここから覗いてろ』義将はウサギから出でくると、ふわふわとあいつに近付いていった。義将は寝転がつているあいつの顔を覗きこんだ。

『おーい美少年、起きてるかー?おーい!』

そう、彼の耳元で叫んでいる。

なに無駄なことやつてんだか…聞こえるはずないのに。

すると、成神聰也ががばつと起き上がった。

それだけじゃない。なんと、あらうことか義将の襟元をがつと

掴んだのだ!

あたしは心臓が飛び出しそうになつた。

幽霊に触れる…?そんなのありえない!

義将は突然掴みかかられてどつきりしている。

『お前…何でオレに触れるんだ?』

義将は苦しまぎれに言つた。

『さつきから黙つて見ていれば…人の眠りを邪魔しやがつて』  
そう低くつぶやき、成神聰也は掴んだ手に力を込める。締め上げられた義将はうげーっとうめいた。このままじゃ義将が危ない。

あたしがまじまじしていると、成神聰也は振り返らずに言つた。

『あと、そこにいるやつ。何してる?』

ぎくつ。間違なくあたしのことだ…

ばれたならもう隠れている必要はない。あたしはそろそろと戸を開けて屋上に出た。

『あの…その人、放してあげて』

あいつは頭をかすかにこつちに傾けた。

「「」の幽霊… あなたの連れか？」

うーん、連れっていうか、なんというか…

あたしが迷つていると義将が目で訴えてきた。『何でもいいから言つとけ』と言つていて。今にも死にそうだ。

「あー、うん。まあそんな感じ」

成神聰也は怪訝そうにあたしを見て、ぱっと手をはなした。義将はすぐに飛びのくと、げほげほと咳き込んでいた。

彼はすっと立ち上がってあたしのほうを向いた。

「あんたも幽霊を連れて歩くなら、ちゃんとしつけとけ。人の睡眠を邪魔しない程度にはな」

そう言つて義将を睨んだ。当の本人はぜいぜい言いながら必死に呼吸を整えている。やれやれ。

成神聰也はふんと鼻を鳴らし、あたしの横を通り過ぎて屋上から出て行こうとした。

そこであたしは大事な質問を思い出した。ぱっと振り向き、階段を下りていく彼に叫んだ。

「ねえっ！ 何でさわれるの！？」

彼は足を止めて振り返る。

「あんたが知る必要はない」

そう一言言つて、すたすたと階段を下りていった。

あたしはしばらく動けなかつた。あたしと同じように幽霊と話せて、しかも触れる… どうなつてんの？

ようやく正常な呼吸を取り戻した義将がよろよろと戻ってきた。

「まあ、あれだな… かなり… 力が強いってことは確かだな… うん」

あたしは階段に座り込んでいた。

義将はさつきからやけに襟元を気にしている。何百年かぶりに体を触れられたのだから無理もない。

でもまあ、久しぶりにイタイ目にあえて少しば思は思い知ったかも。これで少しばいたずらを控えてくれることを祈るのみだ。

それより、問題は『彼』だ。

正直言つて、あたしは自分と同じような能力を持つてる人に初めて出会つた。

テレビでなら山ほど見てきたけど、心霊番組とか、幽霊が見えるつて人が山奥の廃屋に潜入するやつ。

はつきり言つて廃屋なんかに入ろうつていう人の気が知れない。大抵、番組の終わりのシーンで廃屋から出てきたアイドルには『憑いてるんだから、見てるこつちは気味が悪いことこの上ない。

あたしに言わせれば、霊能力者のくせに幽霊がわんさかいそうな所にづかづか入つて行くなんてどうかしてる。

そういうことをするのは、大抵『見えるだけ』な人だ。

でも彼は違う。あたしと同じように話ができるだけでなく、さわるという能力まで備わってる。

あたしもそういう力があつたら、義将がいたずらしてきたときパンチをお見舞いしてやれるのに…

義将はあたしの視線に気づいてにやけた。

『なんだよ、そんな見んなつて！男前なのはわかるけどよ～』

「違うつ～」

とりあえず、今はプラスに考えこう。彼の前では見えるものを見えないフリしなくてもいいってことだし。慎重にしてなきやいけないのは義将だけだし。

たすがにもう苦痛は味わいたくないだろ？から。

『つてかお前、フツーに話してたじやねーか。あの、成なんとかつてやつと』

義将は名前を口にするのもいやだという風に言つた。

「成神、でしょ」

口に出して言つてみると神秘的な名前。何か力が宿つていそうな感じだ。（神社の名前）ありそう。『成神神社』（）

言われてみれば、あたしさつきちゃんと話せてた。昨日からしたらたいした進歩だ。

それどころか、正直に言つとあたしは、彼に興味を持ち始める気がする。ひょっとしたらまだ秘密を持っているかも。そう思つとわくわくしてくる。

思つたよつこの仕事、当たりかもしねない。

「よしつ、とりあえず、成神聰也を徹底的に調査するわよー。」

『え…ほんとに？』

義将はかなり気が乗らなさそうにつぶやいた。

その日あたしは、彼ができるだけつぶさに観察した。ストーキングにならない程度に。そして得た情報は

1、休み時間はたいてい屋上に行つてゐみたい。授業をサボるときも同様。

2、これといって親しそうな友人もなし。一匹狼で行動してゐる。（）というより、あのありえない容姿とつめたーい性格でみんなも気安く近づけない）

3、匂「はんはきつと購買のパン。（なぜかこうじ、匂休みに手ぶらで教室を出てつたから）

とまあこんな感じ。うーん、これといって興味をそそるものはない。部屋のベッドにぐるりと転がつた。

義将は今日は早々と姿を消している。たぶんくたくなのだひつ。あたしもさつさと寝よう。立ち上がってカーテンを閉めようとした。あたしの部屋の窓からの眺めはほんとにサイコーだ。なんてつたつて、ちよつと下を見下ろせば墓場なんだから。

おまけに今日はざわざわと嫌な夜風が吹いていて、迫力満点だ。ぶるつと身震いしてとつととカーテンを閉めようとしたとき、何かが視界に入ってきた。

あたしははつとして墓場を見下ろした。

一つ、ぼつと白い光が見える。あれは 幽霊だ。  
光はあたふたと落ち着かずに動き回つてゐる。まるで何かから逃げるようだ。

その時、ドカッと鈍い音がして幽霊の近くの墓石がガラガラと崩れた。

幽霊は慌てて姿を消そうとすりと薄くなつたが、その光は何かにかき切られて、消えた。

何が起こつてゐる…？あたしは暗闇に目を凝らす。  
ほんやりと何かがいるのが見えてきた。形からしておそらく人だ。すると、そいつははつと気づいたようにこつちを見た。真つ赤なぎらぎらした目が獣のように光つている。

あたしは怖くなつて、カーテンをすばやく閉めた。そしてベッドにもぐりこみ、息を潜めた。

5分くらい経つただろうか、おそるおそるカーテンの隙間から外を覗いてみる。

もつねりこむ誰もいなかつた。

「まつたくーどーのどーひつだ、罰当たりめー。」

庭そうじから帰ってきたおじいちゃんは、顔を真っ赤にして怒っている。

檀家のお墓を誰かに破壊されたことに立腹りしこ。

あたしはその真相を知つていていたけど、黙つてもぐもぐご飯を食べた。昨日のことを説明するには、幽靈を見たことから言わなければいけない。このカタブツおじいちゃんは幽靈なんて信じていなければ、あたしが夢を見たと思うか、病院に連れて行くかどちらかだらう。だからおじいちゃんは、あたしの解決屋のこともおかしな小遣い稼ぎか何かだと思つてこる。

「ほんとにくしからんやつだ…仏様を粉々にしおつてー今度来たら取つ捕まえてやる」

おじいちゃんはぶつぶつ言いながら納豆をぐしゃぐしゃ混ぜた。墓石をぶつこわすようなやつを果たして捕まえられるのか不明だけど。あの真つ赤な瞳を思い出した。

そうこえばかりで見たよつた氣がする。あの血のよつて赤い瞳を

そう、あの夢の中で。

昨日見たやつは夢の中のあいつなの?

だとしたら、あの恐ろしげ夢が現実に起つることだらうか。

〔冗談じゃない! 殺されるなんて。何も起つらなことを祈るのみだ。〕

あたしは身震いして味噌汁をすすつた。

うちの朝ごはんはいつも味噌汁が出る。圭太に言わせると「何入れてもいいし作るの楽だから」らしい。

ちなみに今日は野菜とちくわ、そしてトウモロコシが入つてこる。

味噌汁にトウモロコシなんて、コーン好きのあたしに言わせればまさに冒涜。

ああ、一度でいいからベーコンソーセージに野菜サラダに、あつあつのコーンスープの朝食を食べたい…

自分の料理の腕をここまで口惜しく感じる瞬間はない。

でもまあ、朝食は手抜きだけど、圭太は晩ごはんにはかなり手をかける。ああ見えて料理にはこだわりを持つてるから。あたしなんかが作ってる途中にキッチンに入ろうものならとたんに追い出される。あたしに手伝わせるとどうなるか幼い頃から身をもつて経験してきたからだ。圭太の料理の腕はあたしの存在によって磨かれたと言つてもいいくらい。

あたしも少しあうちの食生活に貢献したいって思つてたけど、最近何もしないのが一番だとわかった。

あたしにできるのは、洗濯機を回して中身をおじいちゃんに干せせるぐらいい。

口の中でトウモロコシと味噌がビリコウなハーモニーを奏でていたけど、文句は言わないのでおいた。

圭太がいるから家事が成り立つてるんだもの。多少口の悪さに目をつぶれば、いい旦那さんになるはずだ。

「なあ」

「ご飯を食べ終わって玄関に向かおうとするとき、圭太がふいに声をかけた。珍しく怪訝そうな顔だ。

「何?」

「…いや、やつぱなんでもない」

「あたしに一日会えなくてさみしいか? そりかそりかー」

「超嬉しいー!」

あつそ、ふーん。あたしはすたすたとキッチンに戻つていく圭太の

背中を視線で攻撃しておいた。

外に出ると、息が白かった。冷たい空氣に触れた肌がピリピリする。あたしはマフラーに顔を深くうずめた。

今日も自転車はスタンバイされていた。荷台に義将を乗っけて。

『おまえ寒そうだな』

着物一枚のあんたのほうが寒しだけど。でも真冬に何を着てたつて義将には関係ない。感じないんだから。

「いいから学校行くわよ」

あたしは裏のお墓をちらりと見て、自転車に飛び乗った。

## 第1-5話（前書き）

第1-4話を大幅に変更しています。変更前にすでに読んでしまった  
といつ方、本当に申し訳ありません…。  
今後こんなにも投稿済みの話を変更する「ことはない」ので、今回ばかり  
了承ください。

教室にたどり着くと、今日も彼はまだ来ていなかつた。また屋上に行つてゐるんだらうか。

『へつあんなやつ、来なくていいんだよつ！』

義将がそうつぶやくのが聞こえた。昨日のことですつかり彼の「こと」を嫌いになつたらしい。

あたしは聞こえないフリをして麻海のところに行つた。

あたしに気づくと麻海は駆け寄つてきた。

「ねえ万夜、ちょっと3組まで行きたいんだけど、いい？」

「いいけど、どしたの？」

「借りてたマンガね、返しに行きたいの」

麻海の手には黄色い袋が握らわれてゐる。あたしは頷いて、一緒に教室を出た。

あたしたちはぶらぶらと廊下を歩いていた。途中で何人かにあいさつしたりもした。クラスが違うからほとんど話さない子たちだけだ。

教室でも、あたしはほとんどいつも麻海といふ。麻海は他の子みたに、沈黙をおしゃべりで埋めたりしない。だからあたしは一番気楽で、落ち着いていられる。

はじめはブリックなのかと思つていたけど、一緒にいるようになつてぜんぜんそんなことなつて氣づいた。麻海のふんわりしたかわいさは天然なのだ。

それに、今どきの女子にしてはすぐきれいな心を持つてゐる。素直で、純粹で。

まさに『天使』つて感じだ。

こんな女子になれたら、つていつも思つ。

マンガを返し終わつて、あたしたちはまた教室に向かつた。その時、  
麻海のケータイの着信音が鳴り出した。

「麻海ー、鳴つてるよ?」

「あ…う、うん」

あわててポケットから取り出さうとした麻海は、ケータイを落としました。

「あつ」

かがんで拾おうとした麻海の手より早く、誰かの手がケータイを拾い上げた。

「大丈夫?」

まるで歌うように滑らかな声に、あたしたちは同時に顔を上げた。そこには、長身の男の子が立っていた。長めの髪は明るい茶色で、耳にはピアスがじゅらじゅら付いている。なんだか軽そうな人だ。その男の子は自信に満ちた笑みを浮かべながら、ケータイを差し出している。

あたしの直感では、絶対ナルシスト。

「あの、ありがとうございます」

「ああ、お礼なんかいいって。こんなかわいい女の子にかしこまられたら、何だか悪いしね」

ペコりと頭を下げた麻海に、彼は脱力しそうな殺し文句を平氣で言つてのけた。

そして麻海の手に自分の手をそえてケータイを手渡した。（ゲー

ッ！）

あたしの予想は大当たりだつたみたい。

「じゃあね」

その人は軽く手を上げてあいさつすると、すたすたと歩いていった。

あたしはようやく顔の引きつりから解放された。

「なんか…すごい人だつたね」

「うん…すゞくかつ」よかつた…

「え！？」

あたしはぎょっとして麻海を見た。着信が切れてしまつたのも気にせず、ほっぺたをポツと赤らめてうつとりしている。ま、まさか。冗談でしょ？

「麻海、もしかして今のこと」

麻海は答える代わりに顔をせつきよりも真つ赤にした。

あたしは叫びだしたい気分だった。麻海の男の趣味にここまでツッコミたいと思つたことはない。

だけど、こんな性格の麻海だからこそ、「えーっ！あんなのど二がいいの！？」なんて言えない。

「そ、そつかあ

と笑顔で言つのが精一杯だつた。

そのあとあたしは、放つておけばふわふわと飛んでいつてしまいそうな麻海を教室までつれて帰らなければいけなかつた。やれやれ、なんだかおかしなことになりそう。

学校は本当に何事もなく終わった。というのも、彼は今日ずっと来なかつたから。

こつちはいつも来るかとひやひやしてたのに損した気分だ。

麻海はあのあと一日中ポーッとして、授業中もあらぬ方向を見つめていた。話しかけても、あたしの声が脳みそに届くまでに2秒はかかつた。

一日ぼれなんてマンガの中だけのことだと思ってたのに、まさかこんな形でお日にかかるなんて。しつかり者の麻海をこんなにしちゃうとは、恋愛つて恐ろしい。かわいいって言えばかわいいけど、今の麻海は本気で心配だ。ふらふらと事件に巻き込まれそうでほんと危なっかしい。

あの男の子のどの辺にクラッときたのかあたしには理解不能だけど、きっと麻海にはキラキラの王子様に見えているに違いない。友人として文句の付け所ありすぎだけど、でも麻海が本気で好きになつた人なら応援するつもり。根つから悪い人つてわけでもなさそうだし。

あたしはせいぜい麻海が危ないことに巻き込まれないように見守つていよう。

いつもより200%くらい輝きを増している麻海の笑顔に「バイバイ」と言って、家に向かった。

あたしは人通りの少ない道をとぼとぼ歩いていた。すぐ横のバリケードの向こうからは工事のけたたましい音が聞こえてくる。

「はあー…恋かあ」

ひとりでに口からこぼれた。

『はーん、小娘も男が恋しくなったか？』

「違うわよー」

男がほしいうて訳じやなくて、恋がしてみたいと思つただけ。恥ずかしいことに、この17年間誰かを好きになつたことがない。だから恋愛と言われても想像でしか知らない。好きになつた男の子と付き合つて、手をつないだりキスしたりするんだろうな、ぐらい。きっとすく幸せなんだろうなとは思うけど、あたしのもとにはなかなか舞い降りてくれないんだから仕方ない。

「はあー、いいなあ麻海…」

『お前もその辺の男適当にひつたりえればいいじゃねーか』

「だからそうじやなくて」

そう言いかけたあたしの目に映つたのは他でもない、「彼」だつた。道の向こう側を歩いている彼は制服のままだ。やつぱりさぼりだな。すると、あたしの視線に気づいたのか彼はこっちを向いた。そしてあたしと目が合うと明らかに嫌そうな顔をした。失礼なんだから。あつかんべーでも返してみようか。

そう思つたとき、彼の表情がさつと変わつた。

あたしはどんな反応を返すかで頭がいっぱい、そんなことは微塵も気にしなかつた。

でもあたしがその意味を察したのは、何かの影があたしをすっぽり覆つたからだつた。

あたしはすぐに上を見上げた。

なんと、大きな鉄のかたまりがあたしに向かつて降つてくる。

それがちらつと見えたのを最後に、視界は一瞬で暗くなつた。耳元

で風が「うつ」とうなるのが聞こえる。

風が鳴り止んだのと、ごおおんとするまじい地響きがしたのは同時だった。

あたしはいつの間にか目をつぶっていたらしい。かたく閉じていた目をそつと開けると、最初に見えたのは成神聰也の横顔だった。すくきれいな横顔。あたしはそれにしばらく見とれていたが、自分の肩をしっかりと掴まれている感触があることに気がついた。

よく見てみると、あたしはあるつことか、彼にお姫様だつこされていたのだ。

な、な、な、なんで !?

顔は一気に熱くなり、頭は湯気が出るんじゃないかというほど沸騰してあたしは危うくパニックにおちいりそうになつた。

そんなあたしのことなんかつゆ知らず、彼はしゃがんであたしを支える手をはなす。

あたしはドスンとおしりから地面に落下し、情けない声をあげた。

「 おーい！あんたら、大丈夫かー！」

工事現場の人たちがどたどたとこっちにやつてくるのが聞こえる。あたしは地面にへたりこんだままあたりを見回した。人だかりでよく見えないが、巨大な鉄筋コンクリートがひび割れたアスファルトに半分埋まっているのがわかつた。間違いない。さつきあたしの上から降つてきたやつだ。

なんで当たらなかつたの？

「 大丈夫です。離れたところにいたので」

「 ああ、良かつた！ほんとに怪我がなくて何よりだよ……」

成神聰也が冷静に説明している声も、あたしの耳には入らなかつた。

あたしは頭の中で今起きたことを整理した。

- 1、道を歩いていて、彼を見つけた。
  - 2、見上げると、鉄骨が落ちてきた。
  - 3、なぜか助かつて成神聰也にお姫様だつこされていた。
  - 4、お尻から落つことされた。

どう考へても2と3の間がおかしい。 ていうかありえない！  
ぱつと顔を上げると、成神聰也は工事現場の人に一通り話をつけて  
すたすたと立ち去ろうとしていた。

「ま…待つて！」

声を出すのがすいぶん久しぶりのよう】感じた。彼は足を止めずに歩き続いた。

あたしは追いかけて、自転車の姿を探した。それはすぐに見つか  
つた。

変わり果てた姿で

さつきの鉄筋コンクリートの下でぺしゃんこになつていたのだ。

おんぼろたけどお気に入りだ。たあたしの赤い自転車……

たけど今、彼を追いかけるにはか先だ。自転車のなきからに泣く泣く別れを告げ、あたしは遠ざかっていく彼を全力で追つていった。

何分経つただろうか、あたしのお粗末な体力は限界に近づいてきた。こつちは走つてゐるのに、早歩きに追いつけないつてどうこうこと? すると、ありがたいことに彼は足を止めた。

あたしはよのよのとスピードを緩め、せいせい言った。

「なんでついてくるわけ？」

振り返った彼の顔は、いつもと変わらない無表情だ。

あたしは呼吸を整えて彼と向き合った。えらく走られたおかげで、足がふらついている。

「ねえ…さつき、道の向い側にいたはずだよね？」

興奮して声が震えた。あたしがそつまつと、彼は田をそらした。

「さあ」

「絶対いた！なんであたしを助けられたの？遠くにいたのに？普通あんなに速く動けるわけない！」

「普通だつたら、な」

あたしは口をつぐんだ。その言葉の意味がわからなかつた。あたしのことをからかつてゐるんだろうか。

「何それ…普通じやないって言いたいの？」

冗談のつもりで言つた。だけど彼の表情は少しも揺らがなかつた。

「だとしたら？」

## 第17話・彼の正体

普通じゃないとは思っていた。幽霊にさわるとか、ありえないほど美少年つてことなり。

だけどまだ何かある気がする。

そう感じたけど、あたしの直感だからあんまり期待しないことにした。

少なくとも「だとしたら?」つていうのは、まだ質問させてくれるつてことよね?

ここは慎重に行かない。こんな貴重な質問のチャンスを逃すわけにはいかないもの。

あたしは頭の中で必死に言葉を手繰り寄せた。

「だとしたら…どこが普通じゃないの?」

彼は至つて落ち着いた口調で言った。

「幽霊に触れられる。あと、人間以上の身体能力を持つてる」「さつきもそれで助けてくれたの?」

「ああ」

つまり、あの一瞬であたしの所まで走つて、抱きかかえて、離れた所に移動したつてこと。オリンピック選手も真っ青の身体能力だ。だんだん彼が人間なのかさえ怪しくなってきた。

どんなにがんばつても、人間はそんな体にはなれないはずだ。

「変なこと聞くけど、本当に人間だよね?」

彼は視線をそらした。

「いや…」

かすかだけど聞こえた。

人間じゃ…ない?

「あなたは何者…？」

彼はあたしを見つめた。その闇のようすに真つ黒い瞳に吸い込まれそうだ。

そして、彼の口が小さく動いた。

「 鬼」

「一二。あたしの頭にその二文字がぽつかり浮かぶ。  
おに？この目の前に立ってるのが鬼？

はつきり言つて  
「俺、スーパーマンなんだ」とか言つてくれたほうがまだしつくり  
きたと思う。

「研究所で薬を投与されて、こんな体になっちゃったんだ」とか。  
頭がくらくらしてきた。物語の世界にでもほつり込まれた気分。  
もしかしたらまた寝過ごしてて、夢を見てるのかも。  
手の甲をつねつてみたけど、やっぱり痛かった。

あたしは目の前の男をしげしげと眺めた。

違う。あたしの知ってる「鬼」はこんなんじゃない。

鬼って、頭に角があつて鋭い牙があつて、虎のパンツをはいてるん  
じやないの？

頭だつてこんなサラサラした現代風じゃなくて、もじやもじやのア  
フロで。

この男の子にはあたしが鬼と認識できる要素は一つもない。

だけどさつきの、あんなすばらしい運動神経を身をもつて体験した  
んだから信じるほかない。この人が人間じやなかつたおかげであた  
しは助かつたんだから。

だけど、そんなの別に鬼じやなくたつていいんじや…

「信じないのは勝手だけど」

彼は特に気にした風もなく言った。

うううだ考え事をしていたあたしを見て、疑つてると思つたみたい。

「う、ううう！信じる」

あたしは半分うそをついた。だつてカタブツだと思われたくないもの。うちのおじこちゃんみたいに。

そこで素朴な疑問が浮かんだ。だつて冷たくてあんまりしゃべらないやつと思つてたか。

「ねえ。何でそんなこと、あたしなんかに話してくれるの？秘密なんじゃないの？」

「言わないとしつこく聞いてきそうだったから」

ぐつ、まあ否定はできないけど。

だけどそんなに即答しなくて。

「何でだらう…君には知つていて欲しかつたんだ」なんて言葉を密かに期待していたのに、あたしは少しがつかりした。

「それに、明日には忘れてるだうじ」

「…はう！？」

あたしつてそんなに頭悪そうに見えてるんだうつか。

「人間が鬼のことを知つても、その記憶は消えるようになつてゐる」

ああ、そういうこと…

つまりあたしに秘密をばらしちゃつても明日にはきれいに忘れてるから、安心して話せるつてわけ。

少しは心を開いてくれたのかと思つたのに。

「あー…そうなんだ。じゃああたしは明日の記憶喪失に備えてもう

帰るから。バイバイ」

あたしはぐるりと背を向けて、ものすじこスピードで歩き出した。

これ以上話したって無駄だ。どうせ明日には覚えてないんだから…

「 なあ」

あたしは振り返った。口びるをとがらせて、さぞ嫌な顔をしているに違いない。

「この盗み聞きしてゐやつ、忘れてる」

そう言った彼の真上から、すうつと義将が姿を現した。

そしてすばやく彼と距離をとつた。そばに寄るのも嫌らしく。

「いつからいなくなつてたのよ…」

それを聞いた成神聰也の表情が少し緩んだ。

「幽靈で助かつたな」

「お前に言われる筋合いねーんだよ」

義将は彼をにらみつけた。

「 そうだな」

彼はそう言って、あたしと反対向きに歩いていった。

『で、あいつは鬼だからオレにさわれたってわけだ?』  
帰り道、義将が急につぶやいた。それまで無言だったのに、まるで  
ずっと会話していたかのように。  
あたしは放心していたので、何て言つたのかよくわからなかつたけ  
ど適当に答えた。

「うん。 そう」

『けつ、どうりで嫌なやつだと思つたら化けもんか』  
義将はべつと唾でも吐き捨てるように言つた。

「化けもんつて… そんなんじやないでしょ、あの人」

『だつてそうだろ。鬼つつつたら妖怪だぞ? 近付きたくもねーな』  
そう言つてブルツと身震いした。

あたしには彼がそんな恐ろしいものには見えないけど。見た目はま  
るつきり人間だし。

それに、一応幽靈は信じてるけど(だつて見えるし) 妖怪は対象外。  
しかも鬼なんてものとなると、もはや未知の生命体だ。

『鬼とエイリアンならどちらを信じますか』と聞かれたら、間違い  
なくエイリアンを取る。

『つたぐ、おかしなこと言いやがる、あのスカした野郎…』  
義将は一人でぶつぶつ言つている。

あたしは聞いてるフリをしながら自分の考え方を続けた。

とりあえず、彼が鬼だつたとしてもそれは特に問題じやない。  
あたしの実生活において、鬼のクラスメートの存在によつて損なわ  
れることなんて一つもないから。  
依頼だつて、彼が幽靈が見えるなら簡単に行きそうだし。

問題は、あたしの記憶が消えるってこと。こんな意味不明なことつてある？消えるようになつてるつて、どんなシステムになつてるわけ。

そりやあ、彼が軽々と嘘をつくような人だとは思わないけど、それでもばかげてるでしょ。

彼と今日話した内容を全て信じたわけじゃないけど、忘れたいとは思わない。

つたく、信じられない。勝手に人の記憶を消去するなんて。とりあえず、そんな事態から、何とかして回避しなきや。メモに書いて残しておくっていう方法がある。

誰かに話しておくつていうのは？

だめ。たぶんその人の記憶も消えちゃうんだろうから。

「あつ、そうだ！あんたが覚えとけばいいんじゃない。一応『人間』ではないんだし」

『はあー？』

義将のぶつくさがやつと止まった。

「明日になつたらあんたが鬼のことをあたしに教えるの。そうすれば…」

『お前なあ…忘れてるだけならともかく、記憶がすっかり消えてなくなつてるやつに説明したつて無駄だろ』

義将が珍しく正論を言った。意外と頭が回るやつなのか。

「やつぱだめか…」

あたしはがつくりと肩を落とした。

じゃあ、メモに書き残すつていう手もボツね。

朝になつて、自分が書いた意味不明なメモに悩まされるだけだろうから。

『まつ、あいつが言つたことなんか本当か怪しいし。明日になつてみないとわからねーな』

『うん…』

本当にわけわかんない。今までの自分の常識を亞としたら、軽く一  
万は超えてる。

なるべくこのこととは考えなによつにした方がいいかも。あたしの頭  
が爆発する前に。

何か手頃な話題はないかな。あつ、あつた。

「そういえば義将つて、いつぬいぐるみから抜け出してたの？」  
義将は思い出していのだろう、しばらく考えこんでいた。すると  
だんだん妙な顔色になり、おかしな行動をとり始めた。  
話すだけなのにそんなに距離はいらないはずでしょ。

『えーと、まああれだ。お前の上から鉄が落ちてくるのが見えたん  
で、反射的に出ちゃった、みたいな？』

義将は雰囲気を和ませるよう、ははは…と苦笑いした。

残念ながら効果はなかつたみたいだけど。

「へえ…それであたしを見捨てて逃げたつてわけ…」

義将の笑顔が引きつっていく。

『あーいや、やつぱり、ああいつことになるとよけたくなるだろ？  
幽靈だつて』

「あんたは鉄骨が当たつたつて痛くもかゆくもないでしょ……」

あたしの形相を見た途端、義将は逃げるようになって姿を消した。

「つたぐ…」

そうつぶやいたあと、気が付いた。

夜道に独りぼっちになってしまったこと。

そのあと、唯一の話し相手を無くしたあたしは一人で家まで歩いて  
帰つた。いつも自転車に乗つて行き帰りしてゐるから、歩くとなると  
ものすゞくノロい感じ。

こんな帰り道、自転車でひとつ走りすればすぐ着いちゃうのにな…

あたしの代わりに犠牲になつた自転車のことを思つて何とも言えない気分になつてくる。

あたしの学生生活に欠かせないお供だつたのに。

中学生になつて買ってもらつた、かわいい赤色の自転車。

ちょっとぴりパワフルな女の子のもとに買われたせいで、五年のうちにおんぼろ自転車に変わつちゃつたけど。

おかげで、自転車屋さんは修理の技術が大きく身に着いたことだらう。

10回目くらいから、客があたしだとわかつたとたん修理器具を持ち出してくるようになつたから。

別に壊そつと思つて乗つてるわけじゃない。こいでいたらまたまた岩や土手があつただけ。

家に帰つた頃にはとつぱり日が暮れていた。  
あたしは玄関の戸をガラガラと開けた。

「ただいま……」

「おいつーおじいちゃん、万夜が帰つてきた！」

「なにつー？」

そんな声が聞こえたかと思つと、一人が奥から弾丸のよつにすつ飛んできた。

圭太はあたしが立つてゐるのを見るなり、おじいちゃんの肩をバシツと叩いた。

「ほら見ろおじいちゃんーだから言つたら？こいつが死ぬわけないつて！」

「わ、わしは死ぬとは言つとらんぞー！」  
おじいちゃんは叩かれた肩をさすりながら言つた。

「…あのー、状況を聞きたいんだけど」

圭太が、聞いてくれよと言わんばかりにあたしの方を向いた。

「さつき学校から電話がかかってきて、おじいちゃんが取ったんだよ。何か工事現場で起こった事故に万夜が巻き込まれた、みたいなことらしいさ。俺はありえないだろって言つたんだけど、おじいちゃんがよく聞かずに電話切つたりするから…」

圭太はそう言いながら横目でおじいちゃんを見た。おじいちゃんはなにも聞こえていないような顔をしている。

何だかおかしなことになつてるみたい。

心配してくれるのはいいとして、できれば勝手に殺さないでもらいたいんだけど。

「あのねー、確かに事故に遭いそつとなつたけど、見ての通りピンpinしてゐるから」

あたしは立ち上がって、かすり傷一つないことを一人に確認させた。するとおじいちゃんは、溜まつたものを吐き出すように盛大なため息をついた。

「まったく、紛らわしいこと言つて…騒いで損したじゃないか」

「そーそ。こんな悪運強そうなやつがそう簡単に死なないって」

二人はそんなことを言いながらさつさとキッチンに引き返して行った。

あたしはぽつーんと玄関に取り残された。

もう少し心配させとけばよかつたかも。

夕ご飯を食べてお風呂に入つて、ベッドに倒れこんだ。

今日はいろいろありすぎて、まだ頭がくらくらしている。

いろいろ考えようとする前に、眠りに引き込まれていった。

起きて、と声を掛けられた気がした。

つたく朝っぱらから… 義将に決まつてゐる。それにあいにくまだ起きる気分じやない。

あたしはさつきより深く布団に潜り込んだ。だけど相手はちょっとばかり強引だつた。

『起きてください』

その声と同時に、あたしの上半身は無理やり引っぱり起された。かなりランボウに。

「あー？ もう、何よ… つて寒つ…」

あつたかい布団は全部ひつぺがされていた。

ブルブル震えながら見てみると、ベッドの横に女人人がいる。しかもそれは、この前依頼してきたあの幽霊だつた。

『お久し振りです』

女人人は前みたいに頭を下げた。

「はあ、どうも…」

あたしは顎をカチカチいわせながら、団子になつている布団を引っぱり上げた。

うーつ、寒い。

この部屋つて、狭い上に空調設備までお粗末だから。

そんな部屋で少しでも寒さをしのぐには、一枚重ねのズボンに分厚いカーディガンでふくふくになつて寝なくちゃいけない。

今あたしはまさに雪だるま状態。

しかも、頭に手をやると今日もぐしゃぐしゃに寝癖がついている。人が見たら、化学の実験で爆発でも起こしたか、はたまた嵐の中を走り回つてきたかって思つちゃつくりますごい。

だから毎日セットするのも一苦労だ。

相手が女性だからまだよかつたとはいえ、こんな格好を人に見られるのは女子としてちょっとまずい。

できればこんな朝早くからじゃなくて昼間に来て欲しかつた。髪がセットできて、ちゃんとした服を着てるときに。

女人はあたしを見て、何か気遣うような目付をした。この格好を気にしてると気付いたのかも。

少しの間沈黙が流れた。何かしゃべったほうがいいのかな。

あたしは「ゴホンと咳払いした。

「……えーと、あなたの依頼のことなんですが」女人の表情は変わらず無表情だ。あんまり感情を顔に出さない人みたい。

どつかの秘書みたいにずっと敬語だし、気難しい人なのかも。

なんかやりづらいな。こういう人つて苦手だ。

「あなたが会いたがってる彼つて、幽霊が見えるみたいなんです。なので、あのー、あなたのところに連れて来るっていうのがどういうことか、よくわからないんですけど、すぐに会わせられると思います。急ぐなら今日にでも」

『実はそのことですが…』

女人は視線を落とした。なんか、妙な予感。

『あの男に会いたがっているのは私ではなく、私の知り合いなんです』

す

はい？

『それで？』

『あの男がどのような男か、『じらんになつたでしょう』

『はあ、そりやまあ一応』

嫌というほど。

『あれは用心深い生き物です。人間と関わりを持つとしません。ことに、知り合いとは面識がありませんので、警戒して会おうとし

ないでしょ。なので、あの男が『いつ』と聞くような人間が必要だつたんです

「…で、その役があたつてわけですか」

女のはうなづいた。

何だか複雑なことになつてきたかも。

つまり仲良くなれつていうのは、彼から警戒されないようになつてことだつたらしい。

あんな妙な言い方せずに、初めからそう言つてくれればよかつたのに。

だけど彼の警戒を解くなんて無謀なこと、何十年かかるか知れない。あたしはできるだけ悩ましげな顔で言つた。

「あのー。言つときますけど、あたしは彼と会つて数日しか経つてないんです。心を開くような仲になるにはすごくおーく時間がかかると思いますけど…」

『かまいません』

もう、ちよつとは考え方直してくれると思つたのに。

『それに、あなたでないといけませんから』

え？

「あの、それつてどういっ…」『では

女のはあたしを遮つて、消えてしまった。

空っぽの部屋に、時計の音だけが響く。

つたく。なんでこう、人が質問したいときに限つて消えちゃうわけ？

そして結局、この意味不明な依頼は続行するみたい。

## 第20話・消えてない

ケータイの時計は8時28分を指している。

学校が始まるのは30分。そして、こんなに一生懸命歩いてるのこ  
まだ学校は見えてこない。

完璧ムリでしょ、これ。

急いだところで、汗でベトベトになつて教室に入るハメになるだけ  
だ。

あたしは無駄な抵抗はやめて、潔く遅刻していくことにした。

はあーっ、疲れた。息が苦しい。

早歩きで息切れなんて、体育のコリが聞いたらきっと号泣するだろ  
う。自分が体育向きじゃないってことくらいよくわかってる。  
一応頭はそこそこいいまつだけど、でも運動に関してはからつき  
ダメ。

50メートル走はみんなの100メートルと同タイム、ペアでキャ  
ツチボールをすれば友達の頭に飛んでいく。

なのであたしはなるべくスポーツと関わらないようにしている。

これ以上担架を出動させないためにも。

あたしはケータイをつつきながらゆっくり歩いていくことにした。  
ウサギのぬいぐるみは、うんともすんともしゃべらない。

最近義将はふらつといなくなるようになつたからだ。

義将のことだから、どつかその辺でもうろついてるんだろう。  
ほんとに、自分から行きたいって言い出したくせにお気楽なんだ  
から。

まあ、おかげであたしは今日一日気兼ねなく生活できる。体育の着  
替えのときケータイをカバンに置いていかなくてもいい。

通りには学生服の姿なんて一つもなかつた。  
あたしは本格的に遅刻してゐらしー。

ぶらぶら歩いていくと、少し先の曲がり角から男の子が歩いてくるのが見えた。しかも、うちの高校の制服を着ている。  
まさかあたし以外にも遅刻者がいるなんて。  
でも、あいさつしちゃおうなんてことは思わない。  
背も高いし茶髪だし、派手な先輩かもしれないから。そういう先輩つて二ガテ。

だけどこのまま行くと、交差点で接触しなくちゃいけない。  
あたしは迷つたけど追い抜くことにした。

田を合させなによつて、下を向いて。もづきゅつと…

「あれ、君…」

え？ あたし？

しかもこの声には聞き覚えがある。

「ああやつぱり。この前の子か」

顔を上げてみると…げつ！

うつかり口から悲鳴が出そうになつた。

あたしと田が合つて、『ナルシスト』はホストみたいに華やかな笑みを浮かべた。

今にもバラがこゝちに降りかかるつてきそつ。

「あ、どうも…」

あつちやー、ついてない。

相手はそんなあたしを見下ろして言つた。

「そういえば、まだ名前聞いてなかつたよね」

「あ、朝日奈万夜…です」

「僕は高槻千尋。ちなみに3組」

「えつ 同級だつたんですか？」

相手は、にこりと優雅な笑みを浮かべた。揺れたピアスの銀色がきらりと光った。

「そ。だから敬語はナシね

びっくり…てつきり先輩かと思つてた。

制服じやなかつたら大学生に見えたかもしねない。

でも良かつた。麻海に報告するネタができたし。『高槻千尋』ね。

それにしてもこの人、何食べて生きてるんだってくらい華やかなオーラを発してた。

「一ーンと竹輪入りの味噌汁は食べてないことは確かだ。

あたしはみたいな一般庶民と立つてると、まるで雑種とドーベルマンを並べたように見えるに違いない。

しかも雑種のほうはヘアスタイルが相当崩れている。

あたしは何だか身体がぞわぞわしてくるのを感じた。  
別に彼の高級感におじけづいたわけじゃない。

そばを通り過ぎていく女人人が、みんな彼のことをちらちら見ているからだ。それも、目をハートにして。

うげーー、自分じやないとはいえ、こんな熱い視線が飛び交う中にいたら窒息死しそう。

あたしは手早く話を終わらせて、ここから脱出しようとと思つた。思つたのだけれど…

「ねえ、よかつたら一緒に学校まで行かない？」

「え…？」

不運なことに、彼のほうが先手だつた。

とっても嬉しいお誘いだけど、なんていうか、正直言つて、行きた

くない。

今日初めて名前を知つたような人と何を会話すればいいのよ?

「こうじうのは、遠慮するに限る。

「あー、でもほら、高槻クンは急がなきゃいけないんじゃないじゃない? こんな時間だしー」

彼はぽかんとした顔をした。

「それはお互い様でしょ」

「うう」

ま、負けた…

そのあと、あたしたちは学校までの長い道のりを歩いた。意外とこの人と会話するのはラクだった。自分で勝手にしゃべってくれるから。

彼がテストの成績とか嫌いな先生の話をするのを、あたしは「うん」「へえーそうなんだ」を呪文のように繰り返しながら聞いた。

彼の長い足には、あたしのスピードは少々遅いらしい。すじーくゅつくりと歩いて、あたしに合わせてくれている。

こんな派手な見た目なのに、けつこう紳士なのがむ。

「 そういうえばさ」

「うん」

ああ、もう三百回田くらこの「うん」だ。

「万夜ちゃんのクラスって、この前転校生来たんでしょ?」

「あー、うん、来たよ」

万夜ちゃんなんて呼ばれたことござわつとしながら答えた。

「うちのクラスでも女子が騒いでたよ。すじーくつかつこういりしげね」

「そう、だと思うけど」

「でもまあ、そういうやつに限って心は鬼のよつにすれんたりするけどね」  
あー、ホントそれ。鬼のよつていうか、実際鬼だし。  
そう、本物の…鬼…？

あたし…覚えてる。彼が鬼だつて覚えてる！

「あ、学校着いたね」

高槻くんの声で、現実に引き戻された。  
さて、どうしよう。とりあえず確かなのは、のんきにこの人と歩いている場合じゃないってことだ。

「ごめん、あたし用事思い出した」

「え？」

高槻くんはきょとんとした顔をした。

「大つ事な用事だから、先行くな。ホントごめん！」

よし、これだけ謝つとけば十分。あたしは返事も聞かずに駆け出した。

彼が屋上にいることはわかつてていた。1時間目はいつもおぼつてるから。

自分にもうひとつ体力があつたらこんな階段をわざと上れるんだけど、残念ながらすでにへ口へ口だつた。

ほんつとに、彼と関わつてから口クなことがない。

事故には巻き込まれ、自転車はペシャンこにされ、こんなに走らされ。

あたしは手すりにかじりついて階段を上つた。

なんとしても、取つ捕まえてあの「冗談」としか思えない言葉の真相を聞かなきや気がすまない。

実際、「冗談だつたわけだけだ。

屋上のドアを勢いよく開けると、フーンスにもたれて座つていた成

神聰也が振り向いた。

あたしを見て、あからさまに嫌そうな顔をした。  
そりやあ汗だくの女の子がせいぜい言いながら立つてたら、そうし  
たくなるのもトーゼン。

「…またあんたか」

もつウンザリつてカソジの言い方だ。

「あんたもずいぶん物好きだな。授業中にこんなとこ来てていいの  
か？」

お互い様でしょ、と言つてやうつかと思つたけど、高槻くんとおん  
なじセリフだと気付いてやめておいた。

「あのねー、あたしはあんたと違つて、用があるから来たの  
あたしはそう言いながら、髪の毛を直した。

「さつと済ましてくれないか

はいはい。言われなくとも。

「昨日のことなんだけど」

彼は眉をひそめただけで、表情一つ崩さなかつた。

「何の話？」

あたしが忘れてると思つて完全にじらばつくれてている。

思わず飛んでいきそうなになつた「ぶしをなだめて、あたしはほん  
と咳払いした。

「ほーー、あたしを助けてくれたあと、いろいろ話したじゃない。  
覚えてるでしょ？」

「…ああな」

「だからー自分は鬼だつて、さう言つたでしょー！」

おつと。思わず口を押さえたけど、遅かった。

彼の表情は凍りついていた。

そして次の瞬間には、彼はあたしの目の前にいた。まるでテレビの  
チャンネルでもぱちりと切り替えたみたいに、一瞬のうちに。

あらうことか、彼はいきなりあたしの襟首をがつと掴んで引っぱり

上げた。

氷みたいにひんやりした手が首筋に触れ、びくつと体が震えた。

「なんで…消えてない？」

「この世の終わりみたいにつぶやいた。

「あ、あたしだって知らない」

舌がもつれて「あらしだってしない」みたいな言い方になってしまった。

彼はカツターシャツの襟を、ぐしゃぐしゃになるほど強く握り締めていたけど、義将の時みたいに締め上げはしなかった。

なぜ息苦しいかというと、あたしがドキドキしてるせいだ。だって、彼の顔がちょっと背伸びすればキスできるくらい近くにあつたから。

このままキスしてくれればいいのに、なんて思つてしまつた自分に、顔が真っ赤になつた。

でも彼のほうは逆だつた。白い肌は青ざめている。

「まさか、こんなことあるわけがない…本当に人間なのか？」

「人間に決まつてるでしょ！」

頭が変だつて思われたことはあるけど（空気に向かつて話しかけているのを目撃されたせい）、人間かどうか疑われたのは初めてだ。彼はありえない…とつぶやきながら呆然としている。

「あのー…出来れば放してくれない？」

彼は、ああ…と青い顔で手を放した。きれいにアイロンをかけたはずのカツターシャツはしわくちゃになつっていた。

成神聰也は額に手を当てて険しい顔をしている。かなり動搖しているみたいだ。

その証拠に、さつきもあたしの目の前で「身体能力」を披露しちゃ

つたし。

「まあ、そんなに気を落とさないでよ。誰にも言わないから」「成神くんって鬼なんだって、なんて言つても信じてくれる人はいないだろう。

「あんたには悪いが…」

彼は額から手を離した。瞳はいつもの鋭さを取り戻していた。

「記憶が消滅していない以上、消えてもらいつ」

一瞬耳を疑つた。

あまりにサラッと

「消えてもらう」なんて言われたからだ。

「あ…あはは、またそんなこと言つちゃつて」

「本氣だから」

「え？」

「これは人間が知つていいことじゃない。生かしておくわけにはいかない」

そう言つと、彼はおもむろに袖をまくり上げた。

彼の手首には、なんの装飾もないツルリとした腕輪がはめられていた。見たこともないような黒い金属でできているそれは、日の光で赤黒く光っている。彼が少し動かすと、カチッという音とともにはずれ落ちた。

しかし、腕輪は地面に跳ね返つてくるくる回つたりしなかつた。ドスッとコンクリートに深くめり込んだのだ。

それだけでも心臓が飛び出しそうだったのに、次の一瞬で完全に停止した。

それは腕輪を外した彼の手を見たからだった。

人間の手ではなくなつていた。

指先にはヒグマも真つ青の鋭い爪がある。

皮膚はさつきの腕輪のよう赤黒く、鋼鉄のよう堅そうだ。ナイフを突き立てたってびくともしないだろう。

まるでモンスターの手。

「その爪で殺す気…？」

「痛みは感じない。魂を浄化するだけだ」

「そしたらどうなるの？」

「体は何日か呼吸するが、やがて死ぬだらうな。肉体は魂なしでは生きられないから」

淡々とした言い方が余計にあたしをぞわぞわさせた。

「こんなことは例外だが、仕方ない」

彼はそう言って、軽く一步踏み出した。

後ずさりしようとしたけど、膝がガクガクして動けない。

「ま、待つてよ！他に方法考えない？」

「何で？これが一番手っ取り早く処理できる」

これがこれから人殺しするつて時に言つセリフだらうか？体だけじゃなく頭もどうかしちゃってるのかも。

「だからって、殺せばいいつてもんじゃないでしょ？あたしは死ぬわけにはいかないの」

「なぜ？」

「家族や親友がいるからよ」

成神聰也の顔に不思議な表情が浮かんだ。

驚いているとも訝しげにも見える顔だ。

「家族…」

「そう。もしあなたが死んだら、家族や友だちが悲しむでしょ？」

「…わからない」

「？」

「俺にはいないから」

しばらく沈黙が流れた。なんだかしんみりした空氣に何も言えなかつたから。

すると彼がすっと背を向け、かがんで腕輪を拾い上げた。

腕につけて向き直ったときには、人間の手に戻っていた。

「…？」

「今日のところはやめておく」

そう言って、彼はあたしの横をスタスタ通り過ぎた。

「他の人間に秘密が漏れる心配もないしな」

「それ、ホントだったんだ……」

つぶやくと肩越しににらまれたので、あたしは口をつぐんだ。

「言つとくが、保留にしただけだからな」

彼はそう言って、屋上から出て行つた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2633d/>

---

あたしと鬼と幽霊と

2011年1月28日10時22分発行